

キリスト教神学における歴史認識 —ラインホルド・ニーバーによる真理の捉え方—

Views on History in Christian Theology:
Reinhold Niebuhr's Perspective about the Truth

佐久間 重
Atsushi SAKUMA

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で寛容さという概念をどのように捉えているかを詳述したものである。ニーバーの解釈を通じて、キリスト者が真理をどのように捉えているかを明らかにすることを狙いとしている。ニーバーに依ると、人間は真理を持っていると考えがちであるが、持っていることと認識することは持っていないことを明らかにしていることになる。このことを確信した人間は、他人の行動や考え方に寛容になれるとして、ニーバーは、寛容さという基準で、カトリック、宗教改革、ルネサンスのそれぞれの思想を論じ、近代の文化の中で真理を持ち得ないという懐疑論や真理を持っているという見せかけが寛容さを欠いた政治的な偏狭主義を生み出しているとして警鐘を鳴らしている。

This paper deals with Reinhold Niebuhr's description about the idea of tolerance in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. According to Niebuhr, we are prone to recognize that we have the truth, which reveals that we do not have the truth. If we see that our truth is not the truth, we can be tolerant to other people's thoughts. Judging from being tolerant or not, Niebuhr tests Catholicism, the Reformation, and the renaissance. Niebuhr warns that political fanaticism, represented by the Nazism, was produced in modern days by skepticism that we can not have the truth in history and the pretension that we have the truth. In this pretension we are intolerant to other people's thoughts.

キーワード：ラインホルド・ニーバー，恵みの意味，真理，寛容さ，偏狭主義
Reinhold Niebuhr, meaning of grace, truth, tolerance, fanaticism

I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。^{注1)}プロテスタントの神学者

として、ニーバーは、人間にとっての真理とは何かを明らかにする。簡単に言うと、神の恵みの実現がキリスト者にとっての真理である。人間は、歴史の中で神の恵みを理解することが出来るが、それを完全に成就することは出来ないというのが、ニーバーが取り続け

る立場である。ニーバーの視点からすると、人間は真理を持っていないが、持っていないことになる。人間は自分だけが真理を持っていると言う立場を取ると、そこから見せかけや偏狭主義が出て来る。そうした自惚れに陥らないために、真理を持っていないという認識が重要になり、寛容な態度を取ることが出来る。寛容な態度を基準にして、ニーバーは、カトリック、宗教改革、ルネサンスの思想を論じているが、以下でラインホルド・ニーバーの論述を詳しく紹介することにする。^{注2)}

II. 真理の意味

1. 真理の捉え方

ニーバーは、キリスト教の恵みという概念に従い、人間の歴史を、歴史の意味の開示と成就の中間として捉える。この中間は、人間は腐敗と人生の意味の部分的成就という特徴を持つ。人間が救済され、腐敗から完全に免れたと主張すれば、人間の腐敗は増大する。他方、歴史の業績への穢れが、そうした業績の中にある可能性をすべて破壊してしまう訳ではない。このように見ると、歴史上の活動は、恵みが意味する逆説の下にあることが解る。こうした活動を真理の追求と、正義の達成という二つの分野に大別して、この二つの活動を検討することは、歴史の中で人間は真理を持ちながら、持ち得ないという逆説が歴史の事実といかに合致しているかを明らかにすることになるとして、ニーバーは真理の追求に関わる問題点を検討する。

2. 真理についての問題点

歴史の流れに対して人間は精神的自由さを持っているために、人間にとっての真理を受け入れることが難しくなっている。人間の合理的な自己超越の能力は、より高度な判断力を生み出すが、人間が歴史の流れに巻き込まれることにより真理の追求に最終的な限界を設けてしまう。こうして、人間の文化は、自由と限界との緊張の下にある。この緊張に、さらに二つの要素が加えられる。人間性は、活力と理性の有機的統合体であるために、人間の合理的な判断は、人間の活力が生み出す情熱や興味に依存することになる。真理についての理解が、興味という「イデオロギー的な」汚れを持つことになり、本来の真理が人間にとっての都合のよい真理に墮落する。さらに、人間の文化的な追求は、限界のある視点が導く、究極の装いをまとった未熟な主張により混乱する。ニーバーは、これを文化の

罪深い要素として指摘する。イデオロギー的な汚れがなければ、断片的な人間の知識は無害であるが、この不完全な知識を別な視点から補おうとするのであり、ニーバーは、この補いの力を文化的過程の持続的要素としている。

人間は自分の知識の有限性を否定するものであるが、これは自分が無知であることを知らないことに部分的には起因している。このことは、自己超越の能力に欠陥があることを示す。そして、ニーバーは、自分の知識が究極のものであるという人間の罪深い主張のために、真理についての人間の知識が断片的であることが曖昧になっている、と述べる。この問題に対して、ニーバーが提示するキリスト教的な解答は、「キリストにおける」真理を理解することである。人間は、自己超越の力により、自分を越えたところから生ずるものの意味を理解しようとし、これを真理とする。そして、この真理が罪深いものであることを否定する。このことについて、ニーバーは、真のキリストは期待されるが、同時に拒否されることになる、と言い換える。こうして、キリスト者は、自分の真理が罪深い矛盾を持っているにも拘わらず、この真理を受け入れることができる。これを受け入れることで、キリスト者は、歴史における自己中心的な真理という腐敗を乗り越えられるようになる。

次にニーバーは、聖書の原理から派生した歴史に表されたロゴスについてのキリスト教的な概念と、古典文化に起源のあるロゴスの原理との違いに言及する。ここで、ニーバーは、人生についてのキリスト教的な解釈の土台から生じた二つの原理を対比させる。古典的なロゴスの原理は、キリスト教的神秘主義の形をとって現れ、聖書の原理の代替とされた。この原理に従えば、人間の中にある神的要素は、歴史の有限性から解放される。この原理をより強力にした近代の原理は、真理の問題についてのキリスト教的解釈と混ざり合うことになる。それに依ると、真理は、キリストを受け入れた人の心の中に打ち立てられることになる。そうした人は、罪人ではないとされる。もう一つの原理によると、より完全な真理は、歴史の中で解放される、となる。前者の見方は、文化の領域でのカトリック的浄化(justification)と同じ捉え方である。後者は、ルネサンス的な文化の捉え方である。この中には、古典的な概念とキリスト教的な概念とが混じり合っている。それは、歴史への意識により変容したロゴスの原理である。このロゴスは、歴史からの解放によってで

はなく、歴史の過程を経て浄化されるものである。歴史は、ロゴスの穏やかな現出と浄化の記録とされる。このルネサンス的な捉え方の典型が、ヘーゲルの歴史観である。ニーバーが言う聖書的な原理とは、恵みについての逆説的解釈を受け入れる原理である。

キリスト教の歴史の捉え方の中では、キリスト者には真理についての腐敗から免れているという見せかけばかりでなく、救済とは真理を持っていることと持っていないことの両義であるとの自覚もある、とされる。真理を持っているという見せかけは、新しい嘘を導くことになるが、これが、真理について恵みの解釈が持つ逆説である。このことをニーバーは、次のようにまとめる。キリスト教にとっての真理とは、人間は真理を知ることができないし、知っているという見せかけも避けることができないことを認識することである。この逆説を理解することが、恵みが持つ二面性が意味するところである。人間は、自分の思考や行動の中で真理を打ち立てようとする時には、自らの腐敗を意識することはない。他方、祈りの時のように、自分の思考や行動を超越する時には、自らの腐敗を意識できる。こうした意識を自分の思考や行動の中で持つことは可能で、その時には、自分とは異なった主張をする人への赦しの感覚を創り出す。

ニーバーは、「恵み」と腐敗した真理という意味での「自然」とを対比させ、人間がこの対比を理解した時にのみ「恵み」は人間の思考や行動を浄化する、と言う。ここに、赦しの秘密があり、憐れみは、自分が罪人であることを知っている人にも可能なものとなる。対立する真理に憐れみを促す対応は、人間の魂の浄化を命じる。こうして、浄化 (sanctification) と義認 (justification) として定義される恵みの二つの側面は、文化の分野での真理の追求においては、他の分野ほどには対立することはなくなる。真理の問題へのこの取り組み方を、このように聖書的に定義し、宗教改革で開花した聖書的逆説を判断するとしたら、真理と文化の問題との取り組みでは、宗教改革が成功したことにはならないと言うのが、ニーバーの主張である。ここでニーバーは、聖書的逆説をどの位正しく理解しているかの基準として、信念を異にする人々に対する寛容の態度を取り上げ、論じて行く。

寛容の態度には、行動を導く信念を持ち得る力と、赦しの精神を維持し得る力の二つの基準が含まれている。この基準で判断すると、宗教改革は、キリスト教の他の思潮に対して優れているとは言えない、と言う

のがニーバーの見解である。一般的に、キリスト教史を見ると、他の文化と同じ位ひどい偏狭主義があったことが解る。キリスト者の人生の中で明らかにされると言われる恵みは、心の有限性を越える程にはキリスト者を高めることが出来なかった。例えば、地理的条件により引き起こされた教会の分裂は、恵みによって生きているとされる人達の限界の証明となった。また、宗教上の争いなどは、救済されたとされる人達の生活における罪を表している。キリスト教に反発する人達は、恵みが未完成であることが歴史の見せかけを生み出していると思なす。宗教自体に反発する人達は、キリスト教信仰が世俗の文化への懐疑論や偏狭主義を提示しているに過ぎないと批判する。

3. 判断基準としての寛容さ

ここで、ニーバーは、寛容さの態度を基準にして、キリスト教の様々な信仰を検討し、一つの結論として、カトリックのキリスト教信仰には、原則として不寛容の要素があった、と言う。さらに、宗教改革の思潮は、宗教論争においては悔い改めの成果を打ち出せなかった。近代思想の中にある寛容さの態度の主な源泉は、ルネサンス運動にあったが、リベラルな精神が打ち出す寛容さの態度が、思想と行動との間に有機的な結び付きを果たしているかを次に検討する。

(1) カトリックと寛容な態度

カトリシズムは、恵みについて特別な考え方をして、人間は真理を無条件で所有しているとした。カトリック文化の領域では、この考え方は恵みについての聖書的逆説を無視することになった。近代カトリシズムの世界で高名な、アウグスチヌスの研究者の一人は、異端審問 (inquisition) について記述していて、ドミニコ派が真理の唯一の保持者であることを指摘していた。異端審問の正当化についてニーバーは、単なる人間が真理を持ち得ないことを説く聖書の真理をカトリックは理解していないことを表していて、この過ちが異端審問の根底にある、と述べる。カトリックは、信者各個人は謙遜さを持った人が多く、真理について頑迷で偏狭なプロテスタントの人達とは違うが、集団としては不寛容の態度を示して来た。不寛容な態度は、キリスト教の他の見解を押さえ込もうとするところに現れた。エリザベス朝時代のイギリスのイエズス会派の指導者であるロバート・パーソンズ (1546-1610) は、唯一の真理の所有者を自認し、その真理を受け入れない

人達は過ちを犯している、と述べていた。^{注3)}

国家宗教を生み出すカトリックの教義は、教皇レオ13世の出した教会令の中で示されたものだが、近代のカトリック神学者の一人も、この教義を強調し、国家が宗教を促進する義務があるとしたら、真理を持つ宗教のみを促進するべきである、と述べた。このようなカトリックの態度についてニーバーは、真理と過ちを単純に区別することが、カトリックにとっては対立する信仰の過ちを追求する手段となった、と言う。真理と過ちのこうした区分は、歴史の中にあるあらゆる知識が持つ曖昧さの特徴を無視していて、神の敵に対するカトリックの怒りを支えたことになる。

ニーバーは、ギリシャ正教の犯した過ちについても言及し、それがカトリックの場合とは少しばかり異なっていた、としている。その違いは、ギリシャ正教が恵みについてより神秘的に捉えていて、有限さに対する永遠の勝利と見なしていることである。ギリシャ正教の神学者の一人は、教会の持つ無条件の真理を、時間という枠の中での永遠の達成として定義した。さらに、ニーバーは、イギリス国教会の見方についても言及し、イギリス国教会はカトリック程には歴史的普遍性を主張しないために、カトリック程の見せかけをせずに済んだ、としている。ただ、イギリス国教会も、自らが持つとする真理の中にある偶然で罪深い要素を認めようとしないうちは持っていた、としている。この過ちのために、イギリス国教会は、近代のエキュメニカル運動^{注4)}の中に共通で普遍の教理を設定することを主張するようになった。教会の教理も歴史の偶然性に属することを認めないために、教理こそがエキュメニカル運動で唯一可能なものという主張をしたのである。ニーバーは、この態度を、罪深い精神的帝国主義の論理として批判する。イギリス国教会は、恵みの領域での有限性の視点を理解しないために、罪の浄化の機関としての教会の役割を否定する傾向があった。

(2) 宗教改革と寛容な態度

信仰による義認という宗教改革の教義は、恵みに関する二つの側面についてのキリスト教信仰を反映している。しかし、ニーバーは、人間は真理を持っていて、持っていないという逆説は、文化の領域にも適用されるべきであるが、宗教改革の思想はそうしなかった、と述べている。そのため、宗教改革は偏狭主義に陥り、教会と市民社会の平和を乱してしまった。宗教改革の思想家たちは、自分たちの説く真理に過ちが混じって

いるという意識をほとんど示さなかった。マルティン・ルターは、異端者の処刑に初めは躊躇したが、再洗礼派(Anabaptists)の人達を処刑してしまった。また、カルヴァンもツヴィングリー(1484-1531)^{注5)}も反対派に対して、ルターと同じく無慈悲な態度をとった。エリザベス女王の時代からクロムウェルの時代までの宗教的混乱時代のイギリスでは、長老派は、カトリックと同様の宗教政策を採用した。自らが迫害の危機にある時は、良心の自由を訴えるが、権威のある立場に就くと、他の宗派を抑圧していた。カトリックとピューリタンを公正な見方で分析したある歴史家は、両者が多の人びとの良心ではなく、自分達の良心の自由を追求していたことを明らかにし、両者の努力が人間の自由の拡大に寄与したのは単なる偶然に過ぎない、と述べている。

宗教改革の神学者達が持っていた不寛容な態度についてより非難されるべきこととしてニーバーは、彼らに反対する人達が宗教改革思想を補う主張を展開していたにも拘わらず、そうした主張に耳を傾けなかったことを挙げる。また、宗教改革時代のカトリックとその他の小セクトとの対立においては、部分的には経済的に豊かな層とそうでない層との対立があり、経済的要素が対立を先鋭化させた。カトリックは、古い封建領主と結び付いていた。神学的な要因と経済的な要因との混在が、宗教改革の歴史的現実であった。宗教改革思想家の不寛容な心境を、ニーバーは次のように説明する。宗教改革の思想家が人間の野望にある不完全さについて、自らの高度の視点で対応していたら、自分の考え方を擁護するための過激な反論を和らげることが出来たかも知れないが、実際はそうならなかった。宗教改革の指導者が不寛容な態度を取った大きな要因には、ニーバーの言葉によると、義認論という狂信的聖書崇拜の考え方があった。キリスト教会に対する批判者の一人であった、トマス・ホップズ(1588-1679)^{注6)}は、聖書がほとんどの人によって読まれると、ほとんどの人が宗教の審判者になることを指摘した。聖書に究極の真理があると確信した信仰者は、精神的な傲慢さを持つようになる。この不寛容さは、カトリックの組織的な不寛容さと共通したものである。

狂信的な聖書崇拜は、カルヴァン派の方がルター派よりも顕著であり、宗教改革論者の偏狭主義を説明する重要な要素であるとして、ニーバーは、以下でその詳細な検討をする。宗教改革思想が、歴史の相対性を飛び越えてしまったのは、人間文化の究極の問題につ

いて真剣に取り組まなかったことが挙げられる。そうしていたら、人間の知恵を否定すると同時に成就させる福音の真理は、一つの単純な可能性として主張されることはなかった。悔い改めに基づく考え方なら、神学も歴史の偶然の影響を受けることを認めることが出来るからである。ニーバーは、神学が哲学と違う点として、神学が自己中心の原理を原則として克服していることを指摘する。しかし、神学の歴史は、「原則として」が「真実として」までには至らなかった。福音の真理を現実の事態に適用する時には、哲学と同様に偶然の要素に従属しなければならなくなる。哲学を軽視したルターには、こうした認識が出来なかった。

ニーバーは、宗教改革で顕著だった不寛容な態度は、結局は、自らの教義的立場からの逸脱の結果である、としている。義認論は、救済されたものの不完全さを前提としていたが、義認論を文化の問題に適用する時に、この前提を維持出来なかった。その結果、宗教改革には不寛容な偏狭主義が出て来てしまった。宗教改革では、聖書は教会組織の権威を打ち破るために使われたが、他方で、人間の傲慢さの一つの手段として使われてしまった。こうした事態をニーバーは、聖書の記述の一部を引用し、創世記にある天使が上り下りに使うヤコブの梯子^(註7)が人間の傲慢さが上って行く梯子に変わってしまった、と述べている。

(3) ルネサンスと寛容な態度

ニーバーは、文化的にも社会的にも複雑な近代社会の中で、人々の生活を潤いのあるものにしていくものとして、人々の寛容さを指摘し、この寛容さをもたらしたのがルネサンス運動であった、としている。その中核にあるものが、健全な懐疑論である。近代文化の中で寛容さが達成されたのは、人々が宗教を乗り越え、宗教的な偏狭主義を打破したためであると見なされる。しかし、世俗的な政治的、社会的運動の中にある隠れた宗教的偏狭主義を克服することは困難である。プロテスタント諸派の考え方には、ルネサンスの精神性と密接に関連性を持っていたものがあり、これが自由や寛容さに大きな役割を果たした。ルネサンスの合理主義者や人文主義者は、理性の普遍性を主張し、多くの偏見に挑戦をして、経験を重視して宗教の誤った普遍性を正した。さらに、ルネサンスの寛容な精神性は、歴史の中にある、あらゆる形態の文化が持つ相対性を明らかにした。ニーバーの見解によると、デカルトは前者に戦略的重きを置き、ロックは後者を強調し

たことになる。

プロテスタント諸派の神学者は、キリスト教信仰を前提にして、キリスト教の持つ偏狭主義を批判した。プロテスタントのセクトに見られる神秘的確信が、教条的な信仰の歴史の中で醸成された多くの確信を超越し、神秘主義に基づく個人主義が、カトリックの画一性に挑戦した。セクトに特徴的な社会的急進主義は、社会的妥協に対して福音の絶対性を主張した。こうして、宗教改革時のドイツ再洗礼派の神学者で敬虔主義の父である、ハンス・デンク(1495-1527)は、寛容さの重要性を説いた。17世紀のイギリスのセクトの中では、独立派(Independents)と水平派(Levellers)が寛容さを主張し、自由の理念の形成に貢献した。ロジャー・ウィリアムズ(1603-1683)などのキリスト教セクトの指導者の方が、ルネサンスの人文主義者よりも自由を主張し、イギリスの寛容さを促進させる上で重要な働きをした。寛容さの主張者の中で最も際立っているのが、ジョン・ミルトン(1608-1674)^(註8)で、彼は、ルネサンスの人文主義とキリスト教のセクト主義を統合した。アメリカの独立宣言を起草したトマス・ジェファソン(1743-1826)も同様の統合を成し遂げたが、彼の思想にはキリスト教よりも合理主義の思想が強く出ている。プロテスタントのセクトがすべて寛容であった訳ではなく、狂信的過激主義の特徴を持ったセクトもあった。反対派には自己を正当化して、軽蔑の態度を取った。時には、その個人主義は、社会的秩序への責任を果たさず、最も自由な社会での最小限の強制の必要性も認めなかった。

自由な社会での強制の必要性に関して、世俗的思想家とセクト主義の思想家とが合意出来たのは、真理の問題への二つの共通した取り組み方が根底にあったからである。第一に、両者とも真理を強制的に押しつけることの危険性を認識していたことであり、第二に、真理の追求において完全な合意を不可能にする人間の視点の多様性を意識していたことである。第一の取り組み方について、ジョン・ロック(1632-1704)は、真理は人間の力に依存することなく、自由に追求することの重要性を指摘した。同様に、セクトの指導者の中には、真理の強制では人の魂を救えないことを説くものもあった。第二の取り組み方は、文化的業績を歴史過程に求めるルネサンス的理解から出て来るものである。ルネサンスの思想は、歴史や自然が人間の文化にもたらす多様な視点を認めていた。この理解の仕方は、人間を被造物として見る聖書的理解に合致している点

でもある。ルネサンスの思想が、歴史の相対性を理解したことは、キリスト教の正統的な見方よりも寛容さの推進に大きく寄与した。

歴史の相対性には、真理についての歴史的視点での理解に断片的な特徴が出てくるということが含まれるが、ニーバーは、これをうまく表現しているものとして、ミルトンの記述を紹介する。ミルトンの記述によると、神と共に真理がこの世にもたらされるが、神が天に昇ると、世俗の世界には邪悪な詐欺師達が出て来て、無垢の真理が散り散りにされてしまい、人間が見つけ出すことが出来なくなったしまった。同様の考え方を、セクトの思想家も取り、一人一人が無謬な真理を主張することを戒めた。このような人間の知識の相対性についての理解の仕方は、宗教的な啓示についての様々な解釈の相対性と結びついていて、ルネサンス思想における歴史認識が復活する中心的要素となった。これが、寛容な態度を判断する二つの試験のうちの一つに答えることの出来る主な要因であり、自分自身の見解とは対立する見解を想定しようとする意志を生み出した。もう一つの試験は、自分の最善の確信に基づいて行動できるかと言うことであるが、ニーバーは、近代の文化はこの試験には落第している、と述べている。意見の自由な交換が行われれば、その過程でより高度な真理が出て来て、幻想に陥らないで済むと言うことをジョン・スチュアート・ミル(1803-1873)も述べていた。知識の交換は、過ちを防ぐようにするための一種の競争であるが、寛容な態度を促す刺激となる。真理が歴史の中で支配的になると言う確信があれば、自分の考えだけを守ろうとする偏狭な考え方を緩和する。

このようにして、寛容な態度が偏狭主義への解決策となるが、ニーバーは、さらに、包括的な真理と断片的な真理との関係をさらに考察する。歴史が包括的な真理の開示に向かって動いているという信念は、時間と永遠との関係についての観念全体の一部である。ルネサンスの見方では、歴史におけるロゴスは、有限さからは開放されないが、歴史の中で支配的になれる、とされた。近代思想にある寛容さの態度が、宗教を放棄することで達成されているとすると、そこには人生と歴史についての究極の問題への無関心がある。近代まで、宗教の問題が偏狭主義の源泉であったので、寛容な態度で得られるものが大きい反面、その弱点も出てくる。それは、究極の問題に無責任な態度をとることで寛容さを獲得するか、あるいは、人生の問題との

取り組みに誤った見方を取り入れるかすることである。ニーバーは、結局、近代の寛容さは宗教の分野にのみ当てはまることで、寛容さを説いた人達が政治的偏狭主義の支持者になってしまっている、と述べる。

寛容さを真に見極める点は、自分にとって重要と思われる真理に対して、反対する人がいたら、その人にとどのような態度をとるかである。これに従えば、宗教上で寛容であることは、真理という究極の問題に対して無責任な態度をとることも意味する。同様に、政治的問題での寛容さは、政治上の正義への無責任や無関心を表すことにもなる。いかなる寛容さも、自分にとっての真理について一時的に懐疑的にならざるを得ないからである。キリスト者が、自分の真理にある自己中心的な腐敗を浄化することを放棄すると、キリスト教の悔い改めは、無責任さに墮落する。歴史の中では真理と過ちを区別することが出来ないと結論してしまうと、無責任さはより完全な懐疑論に墮落してしまう。ニーバーは、ナチス以前のドイツにこの状態を見て、無責任さからくる懐疑論が政治権力への真理の従属の前触れと考えた。完全な懐疑論よりももっと簡単に起こりうるものが、近代では新しい偏狭主義の台頭である。この偏狭主義においては、究極の真理が、これまでは断片的真理と見なされていたものの中に説き込まれて、そこから新しい宗教が現出することになる。

ルネサンスの主要な流れの中にある、断片的な真理の間の交流が包括的な真理に昇華するという信念は、宗教的な立場に変容する可能性がある。このような宗教的立場は、自分の真理に挑戦するもの以外に対しては、すべての宗教に対しても寛容であり得る。進歩と言う近代の概念は、リベラルな文化と定義されるものの根底となっている。もし、この概念が批判の対象になれば、リベラルな社会の全体が揺らぐことになる。そのために、リベラルな社会は、自らの信条への批判には不寛容となる。ここで、ニーバーは、リベラルな社会の信条は疑わしいものだ、とする。すべての歴史的過程が成就へと導かれる限り、その信条は正しいが、すべての歴史的過程が疑わしいものだとするとそれは誤っているのであり、文化的成就の過程としての歴史への確信を、人間はその精神的特徴からして排除することになる。人間は、歴史的過程を超越したり、その過程に埋没したりする被造物であるために、歴史的過程に完全な成就を見出すことが出来ない。さらに、人間は、歴史的過程から自由であるために、人間は発見したとする真理に過ちを導いてしまう。歴史的な真理

が不完全であるばかりでなく、腐敗した真理であることが解ると、その人間は神の憐れみ以外に答がないことを知るようになるのである。

ニーバーは、近代の進歩思想は穏健な宗教と言えるものであり、偏狭主義であるとして、それよりももっと偏狭的な風潮が近代以降では成長するのではないかと述べる。それが、政治的偏狭主義と定義してよいものであり、その最も典型的な例がトマス・ホッブズの思想であり、ナチスの政治信条である。このような偏狭主義は、宗教の議論に対する嫌悪から始まった。宗教の議論は、国家の平成を乱すとされた。ホッブズの思想では、国家への無条件の忠誠を求めることは、宗教と変わらないとされた。ナチズムは、歴史におけるある種の進歩を明示したが、これは宗教への懐疑の土壌の上で、進歩思想の残酷性をもたらすことになった。『ユートピア』を著したトマス・モア(1478-1535)は、ヘンリー8世がイギリスの国益を宗教問題で危機的状況に陥らせた時のルネサンス的国家主義者であるが、政治的偏狭主義に対してキリスト教的な立場が有効であることを主張した。ヘンリー8世に政治的にも精神的にも服従することを求められた時に、モアは、カトリック教会の権威を説いて反発した。ニーバーは、進歩思想の挫折を背景とし、モアの対応の有効性を示し、キリスト教の普遍主義は、プロテスタントやカトリックの信仰に問題があるにしても、今日でも有効な資産である、と述べている。近代の疑似宗教的な思想がマルキシズムであるが、マルキシズムが提起する真理の問題への解決策を、ニーバーは、ルネサンスの土壌に結実した遅い果実と見なし、自分達以外が掲げる真理をイデオロギーの汚れとするマルキシズムはプライドの汚れの一つの形に過ぎず、完全な浄化(justification)の見せかけの世俗的なものである、と述べている。マルキシズムに依れば、プロレタリア階級の特異な見解が、真理の理解のための相対的な視点ではなく、排他性を持った視点であるとされ、ここから、マルキシズムの偏狭主義が出て来た。

ニーバーは、人間がどんな見せかけをしても、真理を持っていると主張することは不可能である、と述べる。真理は、恵みが示す逆説に従属していて、人間が原則としてしか真理を持っていないことを知れば、人間はより多くの真理を持つことになる。そして、自分が持っているとする真理と対立する真理に対する寛容さは、赦しの精神の現れでもある。赦しの精神は、自分の徳に確信を持ちすぎない時にのみ可能となる。真

理に忠誠であらうとすることは、その可能性への自信が必要であり、他人の掲げる真理への寛容さは、自分の真理が持つ限界への認識が求められることになる。こうした認識がなく、自分の真理への自信が打ち砕かれた時に、文化の分野では大規模な見せかけが生み出されて、偏狭主義が広がる。これが、ニーバーの寛容な態度についての主張のまとめである。

III. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第八章を中心にして、神学者として人間にとっての真理をどのように考えているかを見て来た。ニーバーは、神学的な論述に留まらず、真理の社会的意味合いにも言及している。ここに、彼のキリスト教的現実主義の一端が出ていた。多くの神学者は、神学的論述で終始してしまうが、ニーバーは、常に現実の文化的、社会的問題へのキリスト教神学の関わりを論ずるが、本論でもそうした側面を紹介出来たものと思われる。しかし、ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後も続けて行くつもりである。

注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, ラインホルド・ニーバーによる宗教改革思想の捉え方一名古屋文理大学紀要第11号(2011年3月)参照.
- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, II*, Charles Scribner's Sons 184-212(1943) を参照.
Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, I*, Charles Scribner's Sons (1943) の日本語訳として、『キリスト教人間観 第一部 人間の本性』武田清子訳, 新教出版社(1951) を参照.
- 3) イギリス人であるパーソンズは、イギリスをもう一度カトリックの国に戻すために、スペインに亡命し無敵艦隊によるイギリスの制圧を支援した程であった。
- 4) この運動は、1910年のエディンバラ世界宣教会議から始まったもので、プロテスタントを中心とするキリスト教の教会一致の運動である。その後、プロテスタントに東方教会が加わり、1948年の世界教会協議会(WCC)が結成されて今日に至っている。
- 5) ツヴィングリーは、聖書のみを信仰の基準として、チューリッヒで神聖政治を行おうとしたが、反対派への不寛容さの面ではカルヴァンと同様であった。

- 6) ホッブズの代表的な著作『リヴァイアサン』の中で、人間の自然状態を闘争状態であると規定して、その闘争を勝ち抜くために人間の理性が重要になることを強調した。
- 7) 旧約聖書『創世記』28章12節にある。
- 8) ミルトンは、彼の著書『失楽園』の中で、人間が罪を受け入れる崇高な被造物であることを強調した。